

伝統とうの獅子舞しまい

けい子の住んでいる町の大歳神社おわたしじんじやでは、毎年十月に秋祭りが行われます。保ほぞん会の人々が獅子を舞ったり、横笛をふいたり、太たいこをたたいたりするにぎやかな祭りです。けい子は、小さいころから祭りが大好きでしたが、今年はこれまで以上に楽しみにしていました。五年生になったので、初めて秋祭りに参加できるからです。

九月になり、公民館で秋祭りの練習が始まりました。けい子たちも初めて横笛をふきます。小さいころから毎年祭りを見てきたので、横笛よこふえの節ふしはなんとなく覚えていました。でも、初めての練習でわたされた楽がくふを見ると、

『トオーロリリ、トオーロリリ、トオーロリイ、トオーヒャラリーガ、・・・』

と、カタカナの文字がならんでいるだけでした。けい子は（なに、これ？ ひとつも音おとぶがないやん。わけわからへん。）と思いました。保存会の会長さんが、

「まず、みんなで歌ってみよう。それから覚えていこう。」と言われました。

「トオーロリリ、トオーロリリ、トオーロリイ、・・・」

会長さんといっしょに歌ってみると、（あつ、これだ、これだ。

獅子舞の節だ。）と思いました。

次にテープを聞いて実際にさいふく練習が始まりました。大人の人や兄あにがふいているのを見ていた時は、かん単たんそうだと思っていました。でも、いざ自分がふいてみると、ふだんふいているリコーダーとはちがって音が全く出ません。なんとか音を出そうと、むきになってふいても、頭がクラクラするだけです。結局その日は、最後まで『フーフー』と空気の音しかしませんでした。

練習を始めて五日たちましたが、やっぱり思うように音が出ません。けい子は悲しくなってきました。

「なんぼ練習しても、音が出えへん…。」

練習がいやになりかけた時、会長さんが、

「音を出すだけでもむずかしいやろ。六年生も最初は、なかなか音が出なかったんや。でも、今は上手にふいてるし、教えてもくれるやろ。君らもできるようになる。みんなでやったらぜったいできる。おっちゃんは、

うそ言わへんから。

とにかく、練習し

ていこう。」

と、はげましてくだ

さいました。



その日から、けい子は家でも練習することにしました。『フリー』という音を聞きつけて、兄がそばにやってきました。

「まだ横笛の音になってないな。」

「うん、毎日練習してるんやけど、ひとつも変わらへん。私には無理かも…。」

「あきらめたらあかん。がんばらな。秋祭りに出るんやし、来年、五年生に教えなあかんやろ。」

いつもはえらそうにしている兄が、口の当て方や息の入れ方をていねいに教えてくれました。けい子も、何度も何度もくり返し練習しました。そして、その日、初めて横笛はきれいな音をひびかせました。とびはねて喜ぶけい子を、兄もにっこり笑って見ていました。

けい子は、兄から教わったことを友だちに伝えて、いっしょに練習にはげみました。みんなの音が少しずつそろうようになったころ、会長さんがこんな話をしてくださいました。

「よくがんばったな。ここの獅子舞は、五百年ほど前に、※1御着城ごちやくじょうができた時のお祝いに舞ったのが始まりと言われているんや。

でも、戦争※2の後、一度とぎれてしもた。ずっと昔から続いてきた獅子舞ができんようになった時、この町の人たちは、みんなの心がばらばらになってしもたようでも、ものすごくさびしかったそうや。そして、この獅子舞が今までどんなに大切に守られ

てきたかが初めてわかったそうや。だから、生きるのも大変な中、みんなで力を合わせて獅子舞を復活ふっくわつさせたそうや。せやから、おっちゃんらも、獅子舞を受けついでのかなあかんと思ってる。この町に生きてきた人たちが、心をひとつにして代々受けついできた大事なもんやからな。」

けい子は、もう無理だと弱音をはいていた自分が、はずかしくなりました。その日から、ますます熱心に練習を重ねて、ひとつ、またひとつとふける曲が増ふえていきました。

秋祭りの日、大歳神社には獅子舞を見るために大勢ぜいの人たちが集まっていました。けい子たちのふく横笛と太こが、保ぞん会の人たちの獅子舞とびったり合はい、周りから大きな拍手はくが起おきました。横笛をふくけいこの顔は、明るくかやいていました。



大歳神社(姫路市)の獅子舞

※1 御着城：現在の姫路市御国野町御着にあった城。一五一九年に築城されたとされる。

※2 戦争：太平洋戦争（一九四一〜一九四五）のこと。